みやもとだより

第14号　平成28年4月発行

季節のおまつり

二荒山神社の弥生祭

「日光」の由来は、奈良時代にこの地を開山した勝道上人が男体山を補弥洛山（ほたらさん）と見立て、それが二荒（ふたら）となり、にこう（日光）になったのが通説とされる。二荒山神社は千二百有余年の歴史を誇り、その例大祭である「弥生祭」の名は古く旧暦三月に行われていたことに由来している。また別名「日光三社祭」ともいわれ、二荒山神社が新宮、本宮、瀧尾宮と三社にそれぞれ分けて祀られていることからきている。

祭りはどの地でも伝統や決め事を守り行われているが、特にこの土地では氏子同志の間で、格式やしきたりを重んずるため、ひとつ間違うと町単位で争いやトラブル（ごたごた）が起こりかねないことから「ごた祭」とも呼ばれている。

名刺交換の儀式

祭りのメインは四月十七日で、大谷川を境に東町と西町の氏子十数台の花家体（屋台）が町を練り歩き、十時頃に神社に集まってくる。家体が境内に揃ったところで、紋付袴に威儀を正した各町の行事二名、頭役二名が他町を古式に則った作法で挨拶に回る「名刺交換」が行われる。使者たちは中腰で地面に三つ指をついて口上を述べ自町の名刺を差し出す。この一連の動作に間違いは許されない。「ごた祭」の所以である。そのあと、別宮の本社神社へ向けて三基の神輿渡御が始まる。鉾持ち、鷹匠、神馬、太鼓、幟の隊列が古式絵巻のようにつづく。各町の花家体は、太鼓や鉦、笛、三味線がにぎやかに日光囃子を奏でながら拝殿の回りを一巡する「神明廻り」をして、午後二時半ごろ町に帰ってゆく。境内の八汐つつじは春を告げるかのように満開である。

（写真・文　宮本卯之助）

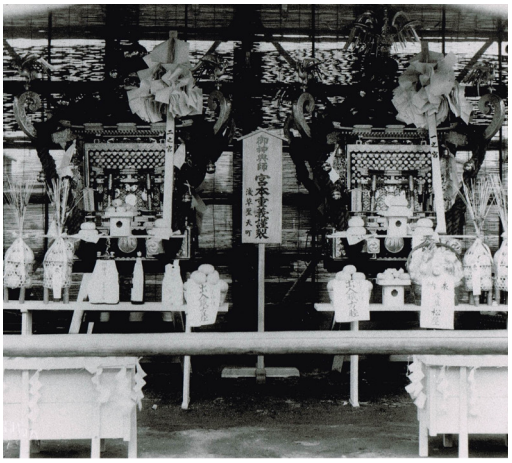
宮神輿渡御（以前弊社にて修復）

神明廻りが済み、一同勢揃いした拝殿前

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

神輿むかしばなし

三社様



復元された一之宮と二之宮

浅草神社は三社様として親しまれています。三社様とは、浅草寺のご本尊である聖観音菩薩像を隅田川から引き揚げた漁師檜前浜成命（ひのくまのはまなりのみこと）と檜前武成命（ひのくまのたけなりのみこと）の兄弟と、彼らを教え導いた土師真中知命（はじのまなかちのみこと）です。浅草発展の礎を築いた三人は三社権現として、浅草寺の東側に隣接する浅草神社にお祀りされています。三基の本社神輿は、祭礼の時には三社様をお乗せになっています。

徳川家光公により寄進された浅草神社の社殿は、徳川家康公をお祀りする日光東照宮と同じ造りです。昭和二十年の東京大空襲で消失してしまった本社神輿。昭和二十五年には一之宮と二之宮を、昭和二十八年には三之宮を復元させていただきました。

浅草徒然にっき

浅草神社「神事びんささら舞」

風薫る五月、浅草神社の例大祭である三社祭の初日には、びんささら舞が奉納されます。浅草千束八ヶ町の氏子によって伝承される田楽芸能です。

長さ十五センチの檜板を一〇八枚連ねたささらは、平安時代よりみられる楽器です。浅草の神事びんささら舞は、随行する獅子舞や、摺太鼓の打ち方に特徴があり、二〇一四年には文化庁選定の無形文化財に認定されました。

奉納の時間になると、あたりは見物を楽しむ方々で賑わいます。

古典芸能へのとびら

道成寺

数ある中でもとりわけ大曲とされる能「道成寺」。清姫という紀州の女性が実らぬ恋の末、ついには寺の鐘つき堂で恋する相手もろとも焼き殺してしまう道成寺縁起を題材にしています。一途に人を思う純粋さが制御不能な情念へと変わる様、命尽きても消えることのない執念の様が表現されています。

能楽師は芸の積み重ねに応じて一生をかけて披（ひら）きの曲を勤めていかれます。技術的にも精神的にも高い水準が求められる曲を無事に勤めることで、一人前としての歩みが始まると言われています。師から弟子へ、厳格に伝えられてきた型は、歴史の重みと洗練された美を感じる瞬間です。

道成寺はその一つでもあります。極限まで切り詰めた演者の動きと、気迫のこもった小鼓が魅せる緊張の乱拍子。その静寂を打ち破る急の舞、そして最大のクライマックス、重さ八十キロもある釣鐘に飛び込む鐘入り。道成寺ならではの見せ場がたくさんあります。

悲しみや憤りを表す般若の面

祭も芸能も、時を積み重ねるにつれ様式化されてくる。過度に様式化されれば、そのものの持つ現在性が弱まり、過去の再現が繰り返されるだけになってしまう。逆に型が出来てこなければ、本来の姿を継承する事が困難になるだけでなく、文化としての熟成が叶わない。こうした問題に直面すると白黒つけたくなってしまうものだが、白も黒も正解とはいえない。

古典芸能の中でも歌舞伎が元気なのは、片方に古典を持ちながら、常に新しいものを取り込む気分を持ち続けているから。

祭も同じく、神事でありながら日常のストレスを発散させる非日常の場としても機能してきたからこそ、生命力を保ってきました。型を熟成する者あり、また型を破る者もあって連綿と継承されてきたのが日本の祭り。清濁を併せ持ったその際に艶やかな文化の息吹が宿ります。今年もまた祭りの季節の到来です。

代表取締役社長
宮本芳彦

発　行
株式会社 宮本卯之助商店
企画広報室
〒一一一-〇〇三五
東京都台東区西浅草 二-一-一一
電話　〇三-三八四四-二二四一
www.miyamoto-unosuke.co.jp